

18世紀瀬戸内地域の医学に関する小考

—讃岐尾池家、備中赤木家の資料を中心に—

町 泉寿郎

(二松学舎大学 文学部)

はじめに

江戸時代、讃岐国で医業を営んだ尾池家は、丸亀藩医となった尾池薫陵やその養嗣子で漢詩人として知られた尾池桐陽などを輩出し、また独自の尾池流針灸術の一派を形成したことで知られ、香川の地方史においては一定の知名度を持つ医家である。しかし、その縁戚に連なる中澤家（香川県三豊市詫間）¹⁾に尾池家の豊富な蔵書や文書が残されていることは、これまで殆ど知られていない。

また備中国総社において医家を継承した赤木家は、6代簡・7代浚が尾池家に学び、8代立が京都遊学し、10代朴斎が江戸遊学するなど、歴代が医学・医療知識の蓄積に努めており、また笠岡の医家で兵器学者一道や画家直次郎を出した原田家との深い縁戚関係でも知られる。その子孫宅（岡山県倉敷市）には豊富な蔵書や文書が残されているが、殆ど研究対象となったことがない。

したがって、本稿起草の目的は尾池家・赤木家の伝存資料を紹介することにあるが、紹介するに足る資料群であると考え理由は、単にこれらが未紹介資料を多く含むというだけではない。尾池家・赤木家の資料は江戸時代中期から後期における医学・医療の展開を物語る典型的な医家資料である。その概要を大づかみに言えば、筆者が別稿で述べた次のような事象が看取される。

(18後半～19世紀前半の西国の医家の多くは)

古方派の医学理論と処方学を基盤にして、それぞれ専門科目の医術を付加するように学んでいる。その専門科とは、例えば1800年頃には荻野元凱の腹診術、華岡流外科、池田流治痘術などであり、1830年頃には賀川流産科術、小石元俊らの蘭方であり、古方派の処方学を基盤にそれぞれの時代に最新の医学知識を刷新しながら加えて学んでいたことがわかる。こうした学び方が、「漢蘭折衷」と言われる医学の、最も普通に見られる形態であった²⁾。

尾池家・赤木家の資料全体としての意義づけは、筆者には基本的にこうした「漢方から漢蘭折衷へ」の展開を示す資料群であると見える。しかしまた、尾池家・赤木家所蔵資料によって医学史に関する得難い情報が得られることも否定できない事実である。その情報とは、18世紀に従来の後世方医学に代わって新たに古方医学が興隆する京坂の医学界の様相に関するものと、それが瀬戸内地域にどのように伝播していったかを示すものである。特に尾池家の場合、医業を創始した立誠が京都で後藤良山に学び、その後継者たちが長く後藤良山流をベースにした医学・医療を展開し、また尾池薫陵の養子となった桐陽が一説に後藤良山の外孫であるともされる関係から、京都の古方派諸家と長年にわたって浅からぬ結びつきがあった。

本稿では、そうした具体的な情報を文書資料からすくい上げて紹介することを通して、18世紀の瀬戸内地域の医学・医療の修学をめぐる実態や、それを支えた情報ネットワークの一端を浮かび上がらせることを目標とする。ただし筆者が現時点で香川県・岡山県の地方史に十分な知識を持たないため、文書等に登場する人名・地名等の固有名詞の解明等によ

平成28年11月10日受理

連絡先 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

二松学舎大学 文学部

TEL 03(3261)1382 (内線921)

Email s-machi@nishogakusha-u.ac.jp

十分な点が残ることは諒とされたい。

尾池家の歴代

尾池家は、その『尾池氏系譜』³⁾によれば足利義輝が永禄の変(1565)に没したとき、懷妊中であった烏丸大納言の女が讃岐に難を逃れ、誕生した義輝の遺子義辰は讃岐の土豪尾池氏に身を寄せ、尾池姓を名乗ったところから始まる。尾池氏は一時期讃岐領主となった生駒氏に仕えたが、1640年に生駒騒動により生駒氏が城地を没収された時、義辰とその子息たちは浪人となり各地に移住した。義辰は通称を玄蕃、別号を道鑑といい、88歳(1566～1653)で没した。

義辰の男が官兵衛義安(?～1644、法号意安)、その男が仁左衛門(1616～88、法号覚窓休意)、その男が森重(1655～1739、久米田久馬衛門、法号遊方思誠)と継承し、森重の代に讃岐大野原(現観音寺市大野原)に住みついた。

森重の男が医業を興した立誠(1704～71)で、名は義均、通称は初め平作・徹平、のち恭庵。別号耻斎・立誠居・学思堂。才能に恵まれた立誠は五年間京都に遊学し、後藤艮山(1659～1733、名は達、通称は養庵)に医学を学んだ。50歳(1708)以降、法体を止めて束髪したと言われる艮山は、立誠の従学時も束髪姿であったはずであり、加藤暢庵・足立栄庵らと並ぶ艮山門の高弟に数えられた立誠も、肖像画等は残されていないので確認できないが、剃髪しなかったと推定される。帰郷して大野原に開業する傍ら、艮山流古方医学を講じ、本稿で明らかにする通り、讃岐だけにとどまらず瀬戸内地域を中心に他郷からも遊学する者が多かった。四男四女を儲けたが、長男・二男夭折のため、門人谷口氏を養子とし、二女楚美を娶わせた。著書に『医方志穀』『癩癖説』『耻斎暇録』『恭庵先生口授』『恭庵先生雜記』等がある。大野原の菩提寺慈雲寺にある墓碑は、大坂の儒者三宅春楼(艮山と交流のあった三宅石庵の男で懷徳堂の教授)が撰文している。

薫陵(1733～84)は、祖父を谷口正忠、父を正直(一時辻姓を名乗る)と言い、名は正常・常、字は子習、通称は讓軒・礼介、別号対月楼。16歳(1748)で立誠に入門し医学を学ぶ。21歳(1753)で尾池家

の養子となり、京都に遊学して(1754～59)、尾池家を継承した。邸内に医学塾寿世館を営み、従学する者が極めて多かった。しかし49歳(1781)で丸亀藩主京極高中から侍医として召し出されたため、大野原から丸亀城下に移った。著書に『経穴摘要』『古今医変』『素靈正語(素靈八十一難正語)』『試考方』『古今要方』『痘疹証治考』『脚気論』『医方便蒙』『薫陵方録』『薫陵雜記』『薫陵子』『大原雜記』等がある。丸亀の菩提寺宗泉寺にある墓碑は後藤敏(別号慕庵、艮山の二男椿庵の庶子)の撰文にかかる。

薫陵が丸亀城下に別家を建てたのち、大野原の尾池家は立誠の三男義永(1747～1810)が継承した。通称は初め亀之進、のち平太・平三。別号児山・肅庵。法号義妙院顯誠日心。義永の後、義質(?～1837、号思誠)―平助泰治(?～1863)―平太郎泰良(1838～94)と代々医業を継承し、義雄(1879～1941、ジャーナリスト、青島新聞主幹)一節と継承した。なお、義質の長兄允は尾藤二洲に学んで儒者となり、江戸で講学した。

薫陵が立てた丸亀藩医尾池家は、その門人村岡済美(1765～1834)が薫陵の二女を娶って継承した。済美は、名珉槃・槃、通称初め干助、後に左膳・寛翁。別号桐陽・思省堂。済美の父は丸亀藩士村岡宗四郎景福⁴⁾で、母は村岡藤兵衛勅清の長女⁵⁾。『尾池氏系譜』に済美を後藤艮山の孫とすることを考え併せると、宗四郎景福は艮山の血縁者とも推定されるが、未詳。済美は大坂の中井竹山や京都の皆川淇園に学び、菅茶山・頼山陽・篠崎小竹らとも詩文の交流があった。著書に『桐陽詩鈔』等がある。

済美の長男静処(1787～1850、静所とも、名大隣、字臣哉)は、丸亀藩医を継承し、『傷寒論講義』『静処方函』『治痘筆記』等の医書を残している。静処の後、淡淡(1835～79、名正煥、通称汶竜)―淡水(1862～1923、名正之)―正義(1896～1923)―正忠(1900～44、正義の弟)―正利(1921生、尾池正文の五男)と継承した。

静処の弟松湾(1790～1867、名世璜、通称享平、字玉民、別号梅隱)は、菅茶山に学び、父桐陽の文才を継いで詩文によって知られた。編著書に『梅隱詩稿』『梅隱舍韻詩稿』『靈餘吟卷』『松湾漁唱』『穀似集(巻1桐陽著、巻2静処著、巻3松湾著)』『晚翠社詩稿』、(京極高朗著)『琴峰詩集』等がある。松

湾の後、竹庵（1807～64、名世績）—雪庵（1843～1916）—正文（1880～1952）—正弘（1919生）と継承した。

赤木家の歴史

赤木家は、遠祖とされる桓武平氏良文の後裔親忠が住んだ信州赤木郷にちなむ。その後備中に移住し川上郡穴門郷字穴田（現高梁市宇治穴田）を拠点とした。天正10年（1582）、忠道・重宗父子が備中高松城の戦いに毛利勢として参陣し、落城後に土着して小倉氏と改め、はじめ賀陽郡八田部村、のち浅尾藩（蒔田氏）領の市場村に住み医業に従事した。

医家赤木家は重宗を家祖とし、2代重吉（1604～65）、3代道運（1613～62）と継承し、4代宗元貞友（1641～1718）の時に旧姓赤木に復した。5代守貞（1674～1741）を経て、6代以降はやや詳細な記録が残る⁶⁾。

6代簡（1724～91、本姓亀山氏、通称要蔵、別名尚綱、別号朴翁）は、讃岐大野原の尾池恭庵の医学塾に遊学して医学を学び、帰郷後、近隣に医名が高くなり、市場村在住のまま浅尾藩医となった。簡は国学者藤井高久に学んで和歌を好くし、儒者西山拙斎とも交遊があった。

次いで、7代浚（1752～1813、簡の二男、通称修平、字子明）も尾池恭庵・薫陵父子に学んだ。寛政10年（1798）に医業出精により浅尾藩から苗字を許された。

8代立（1783～1822、通称太郎、字卓爾）は京都に遊学して吉益南涯に学んだ（1807～09）⁷⁾。文化10年（1813）、父没後に家督を継承し、浅尾藩から無格の御目見以上席に叙され扶持米二石を給された。

9代辨（1801～62、貞造、立蔵、字子明）は笠岡西大島村の医家原田恭庵の四男で、長兄碩斎は鴨方藩医、その長男が兵学者として知られる一道（1830～1910、山田方谷・広瀬淡窓・伊東玄朴門、陸軍少将、貴族院議員、正二位勲一等男爵）である。辨は鴨方藩の儒者西山復軒（拙斎次男）に学んでいる。

10代鼎（1831～99、通称鼎吉、字有実、号朴斎）は備中松山藩儒山田方谷や伊勢津藩儒斎藤拙堂に学び、江戸にも遊学した。二松学舎の学祖として知ら

れる三島中洲は、原田一道や赤木朴斎と同時期に山田方谷の牛麓舎に在塾し、津遊学も赤木朴斎と同時期であったことから、生涯にわたって交流が続いており、原田一道の墓碑文を三島中洲が撰文しているほか、赤木家にも三島中洲の資料が伝存する。鼎は嘉永6年（1853）に一人扶持を加増され、慶應元年（1868）には隣交方を拝命して更に一人扶持を加増された。明治以降は賀陽郡の検疫医や初代小医区区長として地域医療に貢献した。

11代弁四郎（1864～1919）は東京の済生学舎を卒業して医業を継承した。

12代元蔵（1897～1982）は千葉医専を卒業後、倉紡中央病院開院時から外科医として勤務し、父祖の地を離れて倉敷に移住した。

現当主は元蔵の二男制二氏（1925～2017）である。

尾池薫陵の京都遊学の概要

薫陵が尾池家の養子となったのは、宝暦3年（1753）6月25日、21歳のことであった。京都遊学以前の薫陵の修学についてはあまり資料が残っていないが、「童蒙之時所瞻写」と自書する香川修庵『秀庵先生文』等から見て、後藤艮山と香川修庵の著作のいくつかは既に学ばれていたと考えてよい。

『筆記』（翻刻①参照）と題された薫陵の京都遊学日記によれば、尾池家の養子となった9か月後、宝暦4年（1754）閏2月9日に薫陵は遊学に出発する。金毘羅宮で祈願し、丸亀から乗船して下津井で上陸、岡山、三石、姫路、明石、西宮で宿泊しながら、16日に大坂に達し、19日に船で京都に到着している。27日に香川修庵に入門するとともに、艮山の子孫が運営する中立売室町の後藤塾に寄宿した。艮山の四子のうち医者として名があったのは二男椿庵（1697～1738、名省、字身之、通称仲介、別号中立斎）と四男一（名督、通称季介・左一郎、別号一）であるが、薫陵の遊学時に椿庵は既に没しており、薫陵が師事したのは一である。なお、当時椿庵の庶子慕庵（1736～88）が叔父一のもとで養育されていた。薫陵の後藤一のもとでの修学を証する資料には、薫陵が「在京之日、後藤一先生賜焉」と記す『養庵先生碑銘行状』（1734刊）があり、同書は匡郭外に薫陵の書入れ⁸⁾が多く、その修学的一端を知る

ことができる。

後藤塾での生活が始まって間もなく、3月11日に薫陵は病臥した。一時はかなり重篤で、心配した後藤家の家人が国元に手紙を出すほどであった。27日に後藤塾を出て油小路竹屋町の嶋屋伝右衛門宅の裏座敷に移って療養し、その甲斐あって4月26日に後藤塾に戻っている。

一方、但馬の城崎温泉に湯治に出掛けていた後藤一の男宗兵衛は、水腫が悪化して6月14日に客死してしまう。そこで薫陵自身の病状は既に回復していたと見られるが、一旦帰郷して再起を期すことにした。6月28日に京都を発し7月5日に帰郷。7月18日に再び和田浜より乗船し明石で上陸、23日大坂到着。28日に京都に戻った。体調の回復した薫陵は、学業の傍ら遊学生生活を十分に楽しんだようで、ほぼ毎月、京都とその近郊の名所見物に出かけている。

ところが、薫陵が師事した香川修庵は、宝暦5年(1755)2月7日に生国の播磨国姫路へ病氣療養に出かけ、その途次、12日に丹波国古市で卒中に倒れ、翌朝逝去してしまう。73歳であった。翌日、薫陵は同門の熊谷良次とともに丹波亀山まで師の遺体を出迎え、同日、修庵の遺体と共に京都に戻り、25日に葬儀が営まれた。したがって、修庵への従学期間は1年に満たなかった。

3月には尾池の養母が病氣のため一旦帰郷し、7月に3度目の上京を果たす。『筆記』はその後も宝暦6年(1756)2月頃まで名所見物の記事が続く、その後は記事そのものが少なくなり、宝暦8年(1758)2月9日に帰郷した。2度の帰郷を挟んで、足掛け5年に及ぶ遊学であった。

薫陵の京都遊学における修学内容

この遊学中に薫陵が修得した医学は、残された写本類から推測できる範囲で言えば、湯液と灸と温泉浴を中心とした後藤良山の治療学であった。筆写年次未詳ながら、後藤一『一隅』は良山医学の要点を纏めたもので、「医原(養庵先生遺教)」「艾灸」「泉浴」「肉養」「藥療」からなる。宝暦7年(1757)には加藤暢庵録にかかる後藤良山の遺著を筆写している。5月18日にいわゆる『師説筆記』136条を、10月10日に『病因考』2巻を、10月16日に『(先生手定)

藥能』『藥能附録』を筆写し終えている。

この頃の京都医学界で勃興していた新思潮は、薫陵に5年間の遊学成果をすぐに満足できなくさせたくらしく、帰郷の翌年、宝暦9年(1759)7月に薫陵は京都に再遊した。この時の京都滞在は30日程度であったが、大野原に戻ってから立誠門の先輩である総社の赤木簡に宛てて長文の書簡(翻刻②参照)を認めていて、この時期の薫陵の興奮に満ちた修学状況がわかる。「小生義兼々大望御座候ニ付、初秋上京」という言葉が、薫陵の熾烈な修学意欲を伝えている。薫陵は山脇東洋(1706～62)・吉益東洞(1702～73)・松原一閑斎(1689～1765)ら古方派諸名医を歴訪して各人の医説の吸収に努めた。そして東洋・東洞・一閑斎をいずれ劣らぬ豪傑と評価しつつ各人について論評し、とりわけ東洋が医術に長じまた良山流の古方医学に最も忠実である点に推服して、閏7月18日に正式に入門した⁹⁾。一か月間昼夜とも山脇塾に通学し、合間に東洞と一閑斎にも音信を通じた。『傷寒論』の読み方にも三者三様の相違があることなどに強く興味を惹かれている。

薫陵が京都に滞在したこの秋、山脇東洋『蔵志』と吉益東洞『医断』という画期的な両著が刊行された。東洋の刑屍解剖による日本初の観臓は、薫陵が初めて京都遊学した同年同月の宝暦4年(1754)閏2月のことであったが、この時初めて図解を掲げた観臓記録の本編と、医説に関する諸家との尺牘等を収めた附録が公表され、評判をとっていたことが窺える。薫陵の蔵書には当然『蔵志』があったはずであるが、現在、中澤家に伝えられた尾池家蔵書には残っていない。現存資料が自筆稿本などの写本中心であり、蔵書中の刊本の多くは散逸したためと考えられる。また薫陵の東洋に対する評価が解剖観臓ではなく、主にその医術の優秀性、つまり漢方処方に関する知識にあったことは注目値する。しかし薫陵蔵書中、解剖関係書としては東洋門下で萩藩医の栗山孝庵の『婦人九蔵書』が残されているから、薫陵が解剖に無関心であったわけではない。

門人鶴田元逸編纂の『医断』は東洞が公表した最初の著作であったが、医者職務は病氣治療であり「命」は天に属するもので医者との与り知ることではない(医非司命官)とするいわゆる「天命説」が物議を醸した。薫陵は新刊の『医断』を上京時点で

読んでおり、巻頭の「司命」「死生」篇には疑問を感じたので、東洞に面会した折に直接、疑問を質した。東洞の説明にも「一理」あるとしながらもなお疑問は水解せず、「得と研究之上、其説ニ従ヒ可申」とあって、ついに天命説には同調できなかったようである。

在京中の薫陵は後藤家・香川家にも訪問し、その様子も書簡に見えるが、既に向学心は東洋・東洞らに移っていたことが感じられる。香川家では修庵の遺著『一本堂行餘医言』を刊行中であるが、引用書籍が博大なため校正に手間がかかり、完成までに時間を要するなど伝えている。

帰郷後の薫陵の研鑽

帰郷後の薫陵は、古方医学に基づく医術の実践に格闘することになった。「見識ハ諸先生ノ力ニテ相立申候様ニ被存候へ共、帰郷後扱々難^{キハ}行ハ術ノコトニ御座候」、「宋後之書一向読ミ不申候様ニと受^レ教ヲ申候。然とも先入為^レ主候而、後世方用度所存萌シ出テコマリ申候。宋後之書ナキ世トアキラメ、古方書ノミニテ済シ申度コトニ御座候」という言葉が、当時における古方医学の斬新さと薫陵が置かれていた模索状態をよく伝えている。

山脇塾では「吐方」^[10]という新しい治療法も学んだが、副作用が強くなかなか実行できなかったようである。書簡の追伸に縷述されている処方と生薬に関する記述も、薫陵が吸収に努めた新知識の多さを証している。

こうした薫陵の研鑽はすぐに近隣の評判となり、この年から薫陵への入門者が増加したため、塾舎を新築して塾生を収容した。また門前の観音堂を会場にして3・8日の夜に『論語』^[11]の講義を始めたところ、近郷近在から聴衆が詰めかけた。在村知識人としての医者存在意義がここによく表れている。記録に残る薫陵への入門者は、宝暦9年から明和6年(1759~69)までの間に26人を数える^[12]。また明和6~8年(1769~71)には赤木家7代浚が大野原に遊学している。その時に浚が筆写した本に、尾池立誠『傷寒論聴書』、尾池薫陵『経穴摘要』、香川修庵『一本堂行餘医言』等が残っていて、尾池塾における基本的な修学内容が窺える。

薫陵の研鑽の背景には、隣村和田浜（観音寺市豊浜町）の畏友合田求吾（1723~73）の存在も隠見する。薫陵より10歳年長の求吾の京都遊学は薫陵上京の2年前の宝暦2年(1752)のことであり、初めに京都で松原一閑斎に入門し、更に讃岐出身で幕府医官望月家の養子となり学医として名声があった江戸の望月三英にも学び、山脇東洋や吉益東洞にも学んだ。宝暦12年(1762)には長崎遊学して吉雄耕牛に学び、その見聞をもとに『紅毛医言』を纏めたことによって後世に名を残した。翌年(1763)求吾が長崎から帰郷したとき、薫陵は古方医学の立場から黄帝内経を取捨した新著『素靈正語』を呈して求吾に序文を求めている^[13]。

こうした薫陵と求吾の遊学状況と講学内容（共通点と相違点）からは、両者の切磋琢磨する関係が推測される。薫陵編にかかる『諸家文集』に求吾が諸家から送られた尺牘^[14]を多数収録していることから、両者の交流の深さと薫陵の求吾への関心の高さを窺うことができる。他方、求吾が従学した人物が松原一閑斎・望月三英・吉雄耕牛であったことを考える時、後藤良山流医学の有力門人であった尾池家がすぐ近くにあったことは、求吾の学術を考える上で念頭に置く必要があると思われる。

ともあれ、後藤良山の流れを汲む薫陵の医学は、例えば著書『医方便蒙』に見られるように、古方系処方と灸治を併用した独特な古方医学であったと言えるであろう。

その後の尾池家とその周辺—1770年代

前述のように薫陵は安永10年（=天明元年、1781）49歳の時に丸亀藩医に抜擢されて大野原から丸亀城下に移る。その前後、1770~1790年代の尾池家とその周辺の医学状況については、数通の赤木浚宛書簡から若干の情報が得られる。

立誠・薫陵門人で高松藩医の宮武正蔵（字維明）の安永6年(1777)11月の書簡（翻刻③④参照）からは以下のことが分かる。浚はこの年、大野原の薫陵の医学塾に再遊した。半年程度の遊学であったと推定される^[15]。帰途、高松に同門の宮武を訪ねて8年ぶりの再会を果たし、10月末~11月には帰郷した。帰郷後の浚に宛てた宮武の書簡には、「死生ヲ

論スベカラス。只方症相對スルカ否ヲ議シ、仲景ノ規則ニ叶フヲ希フノミ。而后命ニ天ニ委スヘシ」という言葉が見られ、宮武が吉益流の天命説や方証相對に同調するようになっていることが分かる。既述のとおり、薫陵は1760年代における最先端の医学を吸収したが、あくまで後藤艮山流医学を基盤として吉益流には距離を置いた¹⁶⁾。しかし、吉益流は『類聚方』『方極』等の簡便な処方集と、臨床に直結させた『傷寒論』講義からなる学びやすさが歓迎され、東洞没後もますます普及しており、尾池家の門人の中にも吉益流に魅力を感じる者も現れてきたのである。吉益流の盛行が尾池流門人間に師家からの乖離を促した可能性も推測される¹⁷⁾。

また宮武は大坂の儒者中井竹山（1730～1804）との交流も知られ¹⁸⁾、俊もまた中井履軒（1732～1817）の解剖学書『越俎弄筆』（1773序）を筆写している点で懷徳堂の学問と接点があった。尾池家でも薫陵の養嗣子済美は中井竹山に学んでいる。尾池流諸家と懷徳堂との結びつきは、後藤艮山と交流があり懷徳堂の興したことで知られる儒者三宅石庵（1665～1730）及びその嗣子春楼（1712～82）が讃岐と深い地縁があり、また医薬にも深く関与¹⁹⁾していたことを考えれば、自然なことのようにも思われる。しかし薫陵が上京した1750年代までは大坂の儒者・医者とは学問の中心地京都の儒者・医者の周縁的な存在に過ぎず、薫陵が大坂を遊学の地に選ぶことはなかった。それが1780年代以降、中井竹山が学主となって懷徳堂の独自の学風が明確になりはじめると、大坂が地方からの遊学者を集めるようになる。讃岐・備中など瀬戸内地域はもともと地理的・経済的に大坂と結びつきが強かったが、大坂で学問が興隆するに従ってその学問が波及したものと見ることができる。

その後の尾池家とその周辺—1790年代

より直接的に俊に懷徳堂の学問を仲介した可能性のある人物として、備中西阿知出身の儒医丸川松隠（1758～1831、名茂延、通称一郎、字千秋）の存在も無視できない。新見藩儒、また山田方谷の師として知られる松隠は、22歳（1779）のとき大野原で薫陵に医学を学び、33歳（1790）のとき大坂の懷徳堂

で中井竹山に学んだことが知られている²⁰⁾。

寛政2年（1790）6月の浚宛松隠書簡（翻刻⑤参照）には、松隠の京坂での見聞が記される。宮城玄仲や植木顕行ら大坂の老医については、植木の痧病に関する知識以外は殆ど問題にしていない。唯一、松隠が「學術兼備」と高く評価しているのが、この年11月に幕府に召出されて江戸に下向することになる福井楓亭（1725～92）である。烏頭湯・巴豆剂・瞑眩等が話題になっていることから、劇薬をいかに安全に使用するかが彼らの関心事であったことが窺える。恐らくこの背景には、吉益流の盛行に伴う劇薬使用による医療過誤の問題があったと思われる。

寛政7年（1795）の宮武書簡（翻刻⑥⑦参照）の内容は、一つの時代の終わりを感じさせる。この年、宮武の従兄弟である植田正善、礪野敬甫、求吾の弟合田大介（1738～95、名善与、字久敬、別号蘭斎）²¹⁾が相繼いで没した。立誠没後24年、求吾没後22年、薫陵没後11年、赤木簡没後4年が経過している。立誠門に学んだ瀬戸内地域の諸医がほぼ亡くなり、医学・医術そのものも18世紀を通して様々な名医を輩出し一世を風靡した古方派の問題点が露呈するなか、福井楓亭のように中国医学古典に新たな可能性を求める者、蘭方に別の進路を見出す者など、医界は岐路に立っていた。また、寛政の改革による学校官立化が諸藩に波及し、京坂学者の幕府・諸藩への登用が相次ぎ、学問の東漸が促された²²⁾。

宮武は合田大介・植田正善・礪野敬甫等の物故により良医が乏しくなっている当時、大野原の尾池家を継承した義永が仕官の好機とみて、古川古松軒²³⁾（1726～1807）の仲介によって、岡田藩（藩主伊東家、現倉敷市真備町）への求職に動いていることも話題にしている。浚は、義永が岡田藩家老に招かれて9月に備中に来訪した際に、総社に自分を訪問しなかったことに不服を感じていた。立誠・薫陵門に学んだ諸氏は尾池義永を評価せず、双方の関係は良好とは言えなかった。

まとめ

本稿によって明らかになったことは、次のようにまとめられる。

・尾池薫陵は宝暦4年から8年までの足掛け5年の

- 京都遊学中、後藤一が運営する後藤塾に入塾して
艮山流の古方を学ぶともに、艮山の高弟香川修庵
の晩年に従学し修庵の病没・葬儀にも立ち会った。
- ・尾池薫陵の宝暦9年の京都再遊時は、山脇東洋
『蔵志』・吉益東洞『医断』が刊行された時にあたり、
両著が評判をとっていた。薫陵は山脇東洋・
吉益東洞・松原一閑斎と交流した上で、山脇東洋
が最も医術に長じ、また後藤艮山流の古方に忠実
であることを見極めて入門した。吉益東洞の「天命
説」には同調できなかった。
 - ・京都遊学から帰郷後の薫陵は、古方医学に基づく
医術の実践に務め、かたわら医学を講じたため、
近隣から入門者が集まった。また儒書を講義して
医者以外にも門戸を開いたので、多くの聴講者が
集まった。
 - ・大野原の尾池家の隣村和田浜からは名医合田求吾
がでているが、求吾が従学した人物が松原一閑
斎・望月三英・吉雄耕牛であったことを考える時、
後藤艮山流医学の有力門人であった尾池家がすぐ
近くにあったことは念頭に置く必要がある。
 - ・宮武正蔵の書簡（1777年赤木浚宛）からは、後藤
艮山流を基盤とする尾池流の門人の中にも吉益流
の「天命説」や「方証相対」に魅力を感じる者が
現れてきたことを窺わせる。
 - ・宮武正蔵・赤木浚・尾池済美が中井竹山・履軒兄
弟の時代に懷徳堂の学問と接点を持ったことは、
大坂に新しく興隆した学問がこの時期に瀬戸内地
域に広く波及したことを示す。
 - ・薫陵門に学んだ丸川松隠の書簡（1790年赤木浚
宛）からは、劇薬の安全な使用など吉益流の盛行
に伴う医療過誤が問題になっていたこと、そうし
た古方派への反省から福井楓亭のような新たな漢
方治療が起こったことが窺える。
 - ・宮武正蔵の書簡（1795年赤木浚宛）からは、尾池
立誠門の有力者が相継いで没する中で、大野原尾
池家を継承した尾池義永が古川古松軒の仲介によ
る岡田藩へ獵官に動いていること、宮武・赤木ら
尾池家門人が義永に批判的であることが分かる。
また、福井・丸川・古川らも含めて、幕府・諸藩
への学者の登用が活発化していた状況が窺える。

①尾池薫陵『筆記』（中澤淳氏所蔵）

一宝暦三癸酉六月廿五日、有故、師家之義子ト成。
年廿一。

養父年五十。養母年四十。長女年二十、宝暦二壬申
四月播州小野三戸氏へ嫁。

於楫年十一。龜進年七。於三保年三歳。

本生父六十三。本生母五十八。専介。於清卅二。

於安廿四。忠治十六、是歳十二月元服。

一尾池玄蕃君、諱道鑑、承應二年卒。是歳明暦ト改
元ス。

一休意公ハ玄蕃君ノ季子也。兄二人アリ。是ハ後ニ
(1a) 玄蕃君肥後ヘツレユケリト。定テ肥後ニハ後
裔アラン。

一思誠公、明暦元ニ誕生ス。明暦元より宝暦二壬申
マデ百年ニ成ル。

一宝暦四甲戌閏二月九日宿本發足。金毘羅へ廻り丸
亀ニ而一宿。十日丸亀より乗船、即日ニ下津井へ
着、一宿。十一日岡山ニ一宿。十二日三ツ石ニ一
宿。十三日姫路ニ一宿。十四日明石ニ一宿。十五日
西宮一宿。十六日八ツ時大坂へ着。北堀江高木屋橋
伊豫屋平左衛門方ニ逗留。十九日昼船ニ乗、同夜五
ツ時、京都三文字屋へ着。同廿七日、香川先生へ入
門。即日より後藤家ニ入塾。同廿四日平田氏東道へ
發足 (1b)。

一三月十一日夜より時疫相煩、段々指重り申候處、
新蔵様・宗兵衛様、但州御入湯御出被成ニ付御立寄
被下。右御兩人様にも様子見捨難、御介抱被成被下
候。右御両所より國本へ書状被遣、國本よりも兩人
伊平治・久五郎、四月十七日罷登り申候。伊平治ハ
同廿日帰シ申候。段々快復仕ニ付、御兩人様とも四
月廿一日京都御發足、但州御出被成候。五月朔日ニ
久五郎帰シ申候。

一右病氣ニ付、三月廿七日より外宿。油小路竹屋町
下ル所、嶋屋傳右衛門裏座敷にて保養申候。四月廿
六日ニ後藤家帰り申候。

一五月十二日平田氏関東より出京被成候。旅宿竹屋
町三条上ル所ニ御滞留。六月廿三日京地御發足。

一惣兵衛様、但州にて六月一日より水腫御煩被成候
所、段々指重 (2a)、同十四日ニ棄世被成候。

拙者も右不幸ニ付、六月廿八日發足、平田氏と大

坂より同船にて七月二日乗船。同五日ニ帰郷申候。
又々同十八日和田濱より出船致候所、時分柄海上悪敷、同廿二日ニ明石より陸ニいたし、廿三日大坂へ着。北堀江平野屋弥兵衛ニ逗留。廿七日夜船乗、廿八日上京仕候。

一八月十三日京都發足、河州真名子氏へ参、逗留仕。十四日夜、八幡祭礼拝見。同十八日ニ帰京。

一九月廿五日、南禅寺方丈拝見。

一十月四日、高尾・榎尾・榎野楓拝見、且菊御能有之候 (2b)。

一亥正月十 紫宸殿拝見

一同十七日 舞御覧拝見

一同廿三日 知恩院方丈拝見

一二月五日 今熊野靈山へ見物

一香川先生二月七日御發駕、播州へ御療保ニ被成、御帰之節、丹州古市にて卒中風差發、御養生不相叶、翌十三日朝五ツ時御逝去 (3a) 被遊候。同十四日、熊谷良次・下拙兩人、丹州龜山迄御迎ニ参申候。十四日ニ御帰宅、同廿五日御葬送。

一三月九日、國本より養母病氣ニ付、急申来、發足。同十四日帰郷。

一七月六日國本發足、同九日讃ノ松原ノ海カ、リ、白鳥大明神へ参詣。同日夜俄大風、殊之外難義。翌十日、松原上り教蓮寺隠居ニ一宿。同所香川家門人 新介 (3b) 方ニ一宿。十四日朝、大坂へ着。十七日ニ大坂發足、渚ニ一宿。十八日八幡へ寄、同日晚方京着。

七月廿七日、芬陀院へ尋、即東福寺方丈并山門拝見。其時、芬陀焼失、南昌院ニ在住。

同廿八日、嵯峨へ先生墓参。

八月四日、與石原氏、之黄檗及菟道。途中遇雨 (4a)。

八月十日、與吉田元・林由軒、之鞍馬及木舟。

同十三日、嵯峨墓参。

同廿四日、與石原生・奥村生・周藏氏、之愛宕嶽。

廿二六日、後藤斎子・上山兵馬同道、比叡山へ行、唐崎遊覧、大津ニ一宿。

廿七日、石山遊行而返ル (4b)。

八月廿二日、要門様御上京。

九月九日、藤藏同道、妙心寺方丈拝見。

同廿七日、義空師上京。同廿九日、牧門殿預御尋、直ニ同道、芬陀院へ参、一宿。

十月四日、歌中山清眼寺へ行。

同六日、養伯子發足。東福寺中ノ門迄見立。東福寺南昌院へ尋ル。牧門殿之介、忝蔵司留守ニ而不逢候。

十月十五日、義空師關東へ下向 (5a)。

同十九日、菊御能拝見。

同廿一日、真名子要門様、木屋町迄御尋申候。

十一月廿一日、河州へ下ル。同廿四日、上京。

同廿六日、御入内。

同廿八日、御上使御着 (5b)。

十二月四日、御参内。

同七日、兵馬子帰郷。

同八日、御上使御發足。

子正月卅日、鹿苑院金閣寺拝見。

二月一日、三清同道、東山銀閣寺、鹿谷永觀堂拝見。

四月十九日、入湯御發足。六月十九日、御帰家 (6a)。

戊寅二月一日、平井順安老、丸亀迄渡海。即日觀音寺浮田氏へ着、滞留。

同九日、丸亀より乗船、帰郷 (6b)。

②尾池薰陵書簡一宝曆9年(1759)10月12日、赤木要蔵宛一(赤木制二氏所蔵)

赤木要蔵様 常

貴簡辱薫誦、如高喻以来絶音問候処、愈御清勝被成御座、珍重奉存候。当春、御老母様ニも御参宮被成候処、長途御無恙御帰郷、御嫂様ニも此節ハ御全快被成候由、目出度奉存候。弊廬両親初、挙家無恙、不佞無為ニ勤業仕候。老父義も今年ハ別而壯健罷在候而、大慶仕候。御聞及被下候通、小生義兼々大望御座候ニ付、初秋上京仕、古方家先生方へ相見、疑問仕候而得鴻益、大悦御察可被下候。山脇・吉益・松原三家とも豪傑ノ先生ニ而、各所長御座候。傷風寒治療、山脇ハ承氣湯類ニ長シ、松原ハ真附・四逆・附子湯ニ長シ候様ニ相見へ申候。何分、三家中ニ而ハ山脇先生術ニ長シ申候様ニ相見へ申候。専ラ良山先生称シ、古方ノ今日ニ弘り候も全ク後藤先生之力也ト、動輒被_レ藉_レ口申候。依之、小生義束脩仕入門仕候。京都ニも三十日斗留滞仕候。晝夜とも山脇家へ相通イ、其暇ニ吉益・松原へ相通、論説とも承申候。扱々面白敷義ニ御座候。傷寒論讀方とも違イ申候義とも御座候。見識ハ諸先生ノ力ニテ相立

申候様ニ被存候へ共、帰郷後扱々難行ハ、術ノコトニ御座候。只此所致研究罷在候。何分診察粗ク御座候而、是ノミ憂ヘ申候。帰郷後、實母瘡相煩、久々相勝不申候處、最早次第快悦申候。叔父新藏発背ノ證ニテ幅六寸長八寸ノ癰ニテ晝夜兩方ヘ相ツメ、在宿不仕候。是も大方平愈仕候。初發仲景葛根湯ニテ、其後大柴湯ニテ、内托ノ節も透膿散、小柴胡湯用申候。蒼桂ハ受ケ不宜候。何分癰腫初發毒氣盛ナル時ハ大柴胡湯可然候由、山脇先生より受教候所相試ミ申候而、不_レ欺_レ我コトヲ知り、愈仰_二風采_一申事ニ御座候。癰疔も不治ニ及申候ハ、大黃ヲ不用ノ過ト可申候。瘡疾も常山湯宜候。当秋、藏志・癰說ナト板行申候。即藏志并附録ト題目御座候。定而御覽被成候哉。吉益家よりも鑿斷ト申書開板、面白敷事とも相聞ヘ申候。只司_一命、死_一生ノ篇疑敷存候。即上京之節、吉益氏ヘ直ニ承申候所、彼人被申候も一理ハ有之候様ニも相聞ヘ申候へとも、今少疑敷奉存候。得と研究之上、其說ニ從ヒ可申と存候。当夏より隣_一村及ヒ金_一毘_一羅より門人両生石川林之介、三木市太郎投塾、御存之通ノ矮屋、恰如有舟中、紛々罷在候。依之小屋相構申候而、屋敷北ノ方ヘ結構仕候。二間四間余。大方成就仕候。自今以後、御渡海も被成候ハ、御投宿被成候ニも可然ヤトハ御噂申事ニ御座候。当秋より門前觀音堂ニ而三_一八ノ夜、論語開講仕候處、近隣風靡、聴衆も大勢有之、悦申候。何トソ打續ケかしと所祈御座候。傷寒論も不絶讀申候而、此間より金匱要略讀申候。上京之節、後藤・香川両家へも相尋申候。両家とも無異事、後藤家繁昌之體ニ相見ヘ、門生も七人投塾罷在候。香川家も不相替候。行餘医言、先ツ癰證門刊行仕候由、只今校正相勤為申候。遠キ書籍とも引証有之候而、其書只今書肆ニモ無御座書多御座候由。其故急ニ校考出来不申候由申候。右之様子ニ候ヘハ、中々急ニ全部出板ハ出来不申候。貴地痘疫流行、御賢児様方ニも被成候由、珍重奉存候。何も順痘之由、山脇子ニ被申候も、痘瘡も何分大黃之事ト被申候。帰郷後、三黃瀉心湯専用申候。瀉心湯病人多、在京之節、診察仕候。宋後之書、一向読ミ不申候様ニと受_レ教ヲ申候。然とも先_一入為_レ主候而、後世方用度所存萌シ出テコマリ申候。宋後之書ナキ世トアキラメ、古方書ノミニテ済シ申度コトニ御座候。只々難キハ_レ行術ニテ、是ノミ憂申候。非命之難、行之難ト、皐陶ノ語宜

哉。術徳とも行之一字、甚難事ニ御座候。得貴意度義如山河御座候へとも、冗中紛々、書不悉言、揮筆申候。恐惶謹言。陽月十二日燈下
尚々御舎兄様より御加書、忝奉存候。尚又宜御礼被仰上可被下奉願上候。弊邑ニも于今不絶時疫被行、且当秋ハ痢疫流行仕候。三島屋小兒痢疾ニ而落命申候。丸屋御内室も久々時疫ニ而御座候所、漸々此間ハ向生路申候。同志中ヘ御加書相伝可申候。山中氏今日被見、早々伝言仕候。合田氏内室、五月中落命申候。扱々氣之毒奉存候。此間、継妻之相談とも有之候。冗中乱筆、其段御恕察可被下候。以上。
尚々九月最初、尾道栗原屋純藏病氣ニ而渡海、廿日斗滯留ニ而全愈、帰國被致候。水腫之證ニ而、赤小豆湯相応得効申候。全ク大黃之力ニテ御座候。純藏并手代正平ト申人、各志学人ニテ、旅舎中ニテ毎事咄シ申候。乍然各詞章ノ学ニテ、道德学ニテハ無御座候。然とも讀書候人ユヘ、古方之コトとも論候ヘハ、早速帰服被申候。町中脚氣病人兩人有之候而、皆落命申候。一人ハ御存被成候也、工ノ善兵衛ト申モノニテ、随分壮健成モノニ御座候處、不圖疾来、最初より氣急促脉、槇榔湯用申候。何分神祐丸桃花ノ効無御座候而、終ニ落命申候。山脇ニ而ハ三黃湯、大黃黃連瀉心湯格別ニ被用候。林億等校正ハ誤ト被申候。川弓・當販・勺藥、皆華物被申候。當販ハ古方中、一方ノ將帥ニ用有之候。只今猪吹産ノ如キ鈍物ニテハ、中々鴻績ハ無之候。今之當販ヲ用候而無効ヲ見テ古方之當販ヲ疑ハ、大ナル誤ナリト被申候。成程、華産ハ年ヲ経候ヘ共氣味強ク御座候。山脇家被用候ハ二条薬店ニテ随分撰候故か、殊之外宜相見ヘ申候。華物ヲ多用申候。其故殊之外薬肆ニテ吟味宜キを被用申候。華當販、小川屋ヘ申遣候ヘ共、性宜キ品只今御座候由、下シ不申候故、得試不申。華川弓ハ參申候。是も年ヲ経候ヘ共、此邦ノ産ト別而、不相替氣味つよく相見ヘ申候。此間試ミ用ゐ申候。いまた當否ハ不覚候。附子モ華を被用候ヘ共、是ハ和産草烏頭廻ニ勝リ申候。吉益・松原二家とも草烏頭被用申候故、二家ノ說ニ從ヒ申候。
一角、当秋、小川屋ニテ真物一覽、真偽ノ監察仕様学ヒ申候。依之視_レ真偽_二、能々相知_レ申候。山脇ヘ痘ニ効御座候ヤト相尋候ヘ共、中々左様ノ小刀細工ニテ大病ハ治シ不申、何分承氣湯ノコト、被申候。是痘也も傷風寒ト療治一般ト申候。最初ハ仲景

葛根湯，其後從證而此胡・白朮・承氣，各從證而用申候。

○吐方も学ヒ申候。中々此方如キ庸医ノ容易ニ被用候コトニテハ無御座候。殊之外暎眩甚モノニ御座候。吉益・松原二家ニはいまた吐方ヲ用不申候。

○癘證中風ノ治方ハ，山脇家施劑無此上術ト感服仕候。鷗胡菜ハ不洗，其マ、御用可被成候。洗候而ハ効無御座候。兎角治療，小細工ニ相成不申様ニ御考可被成候。此所御工夫第一ニ奉存候。以上。

常山も華産宜候。和産ハ暎眩無御座候故，効も無之候。

③宮武正蔵書簡—安永6年（1777）11月15日，赤木修平宛—（赤木制二氏所蔵）

子明学兄 維明（霜月十八日落手）

本月二日之賜書，昨十四日申刻相達，忝再四拝見。如仰向寒氣候処，愈御揃御清健被為成御座，奉珍快候。弊屋無事罷在候。乍慮外御煩意被為下間敷候。誠ニ先頃は無存掛御責臨被為下，八年振得寛談，縷々蒙清談，新得不少，好快此事ニ御座候。千萬大慶仕候。廿一日，御両所様御揃，無御障御帰館，大喜仕候。学病御同遊，無始終御勞心可被成，御噂仕候。

一丸亀邊之義縷々被仰下，謹而承知仕候。弊屋へ御枉駕之義，亀府邊ニ而噂仕間敷段承知，兼而其心底ニ罷在候。

一敬甫急変難斗ト申候者尤之義，并ニ敬甫ヶ様之変ニ出合候コトも有之由承及申候。平田与惣太留飲腫甚六ヶ敷御座候所，利水ノ藥絶而無功，其後甘遂半夏湯ノ煎汁ニシ，毎日，神祐丸ヲ送下，漸々快復仕候。此義香川主善子被傳聞，利水ノ藥ニテ治セズ，下藥ヲ長服為仕候而ハ，一旦快復仕候而も，何分火急ニ卒死可仕も難斗もの也と被申候。それヲ尾池^ス先生御傳聞。其然リナレドモ，快復之後急死迄も不^マ待，今日がさばけ不申候。腹満氣急，はや死旦タニアリト申候。全快之後，一旦卒尔急瘵ニテ急死仕之被參，此類不佞も時々見及申候。又水氣去後，枯瘦榮瘦，骨立て不復，向死地も見及申候。

安原君，生平虚弱，御多病ノ上又此度之学病後，水氣去後，御静養，何卒漸被為向御快復候様奉祈候。別書愚見申上候。御考可被下候。是則講習討論願学焉之意ユヘニ，少も無伏蔵申上候也。本文畧申上候

通，貴書昨七ツ時相達，今朝又岡山へ出船有之候由申候ゆへ，不取敢右之段可申上，用事ノミ草々如此御座候。又近便ニ尔来之御様子承度奉存候。貴書奉待候。水氣去之後，不佞も甚六ヶ敷義と奉存候。縷々從迹可申上候。御挙家様，安原君より御傳書，逐一承知，忝奉存候。宜被仰上可被下候。妻へ御加書被下，又々宜御礼申上度申候。右ニ申上候通之火急之便，萬々期後來候。甚乱書，御免可被下候。恐々頓首。十一月望五ツ時

コノ便ヲトリハツシ候而は，又しハシ御返事も達間敷と，禿筆乱書，太失礼ニ相成候。以上。

④宮武正蔵書簡—安永6年（1777）11月14日，赤木修平宛—（赤木制二氏所蔵）

安原氏病状再四復讀，本月七日ニ至リ水氣盡除去ト。コノトキニ及テ孜孜汲々，専禁塩淡食素養，一切放下着，唯ソノ再發ノ萌ヲ防クヘシ。數月周身ニ熟路スル水氣ナレバ，一朝去ルトモ又萌サンカ。因テ向ニ言フ如ク，静養自守，加之灼艾數千万壯，元氣ヲ健運循行，毫モ怠慢ナカラシメ，一滴ノ水氣モ留ルコトヲ得サラシムルノ策ヲメクラスベシ。不佞ハコノトキ專一ニ灼艾ヲ希フノミ。七日ノ副書，上衝ノ症アレバ十一俞以下，章門徹腹，腰眼下冷ナルヨシ。三里ヲハジメ足部數所ニ灼スヘキカ。痰欬ノコト，喻ノ如クナルベシ。真武・灸ニテ漸治スベキナルベシ。背惡寒ハ水氣ノ所為ニテ，仲景附子湯ヲ用ル症ニ同キカ。晚景ヨリ夜半ニ至テ上衝甚ク，鼻頭目眇乾燥スルヨシ。且往日時々鼻血アレハ，全軀上逆甚キモノナレバ，足下所謂虚炎升ルナランカ。左スレハ灸・姜・附ノ主タルトコロ也。急ナレハ則其標ヲ治スルナレバ，姑ク大剂麦門冬湯加伏令ナドニテ逆氣ヲ下降シテハイカン。前日不寐性急ナルハ，癘モ兼ルカ。不佞ハ只ソロ、灼艾ヲ欲スナリ。敬甫言フ如ク，危篤言迄モナク候得共，今日ノ謀リコト，死生ヲ論スベカラス。只方症相對スルカ否ヲ議シ，仲景ノ規則ニ叶フヲ希フノミ。而后命ニ天ニ委スヘシ。程子所謂，人事尽ル処則天命也，ニテ御座候。必死トミタトテ，平々淡淡紫蘇・陳皮ノ類ヲ用テ命ノ尽ヲ待コトモ人心ノ安カラザルトコロナリ。壮原湯稍佳ナランカ。淨府湯ニ至リテハ吾カ知ルトコロニアラス。全軀，腹皮緊満如鼓，腹内拘攣，全疝ヲ帶ルナルヘシ。勺藥ハ用タキトコロ也。

故ニ五令モ又吾トラザル所。コノ般水氣去ノコト、真武カ丸子カ禁塩カ。僕謂フ、三法鼎立シテ始奏神功。次第ヲ言ハ、真武ノ力第一、禁塩次之、丸葉斯為下ニテ可有御座候。コノ禁塩ハ東郭ノ新手段ニアラズ。恵美ノ新手段也。三白より東郭ニ示シタルナリ。不佞ハ親友孝介ニ傳ハリ、其禁塩小食ノ術ニテ功ヲトルコト数十人。何卒乍慮外被尽御心力、時宜權變、御復常奉希候。虚里ノ動ニテハ何レニテモ驚駭、妄ニ手ヲ下スコトカタカルベシ。真武・麦門冬湯・伏令飲用シカ、不得已迫レハ時宜ニヨルベケレドモ、どふぞ下藥ハ無用タルヘキカ。但槩シテ言ヘカラス。何ニモセヨ、コノ度水氣去ハ大幸不過之候。後來ハ如何可有之候哉。再發カ又変症カ、不可測候得共、差掛リ水氣不去候てハ當時相濟不申候。是賢兄之熟知スルトコロ、任筆吐露蘊蓄、失言無礼恐入候。本文申上候通、火急之コト、不遑思惟候。只諒察是希。十一月十四日夜三更 維明 子明道兄

⑤丸川松隱書簡一寛政2年(1790)6月8日、赤木修平宛一(赤木制二氏所蔵)

別啓、[缺]月三日之華[缺]一緒ニ小松屋仙二郎[缺]相達し拝見仕候。[缺]御細書扱々御懇篤之段難申謝、忝仕合奉存候。私よりこそ帰郷早々御見舞書ニ而も差上候はつニ御座候處、申上度事も多々之儀、何分罷出御咄申上候所存ニて延引仕候處、全軀此度当月中旬迄も滞留仕候得は能都合も御座候得共、初暑已来少々相勝不申、以之外炎威畏縮仕候而思わしく精業も相成不申、追々盛熱ニも相成、五十里程近退共難事も難斗、勿々罷帰候。果シテ帰郷後も盛炎打續昼夜懶倦、其上此節ハ少々外邪之感、不圖御無音仕候内、此度之御様子、即刻罷出御吊慰不申上候て不相叶儀ニ御座候所、肩輿等ニて罷出候も還而御役介ニ罷成候義、是とても御葬送之御間ニは逢不申、心外御無音失禮仕候。其段幾重も御宥恕被下候様奉頼上候。何分委曲之儀は不遠以參御咄可申上候。

一御尊翁様御宿病、初暑已来御甚被成、御病人様御取紛御心配多、又々時々発動御座候由、扱々御安心之間も無御座事、御痛心奉影察候。發足已来一日も不忘置、御托言のミならず少々老熟と思しき人へは相談仕候。就中、浪華ニて宮城玄仲、南紀植木翁抔

ハ別而老成人故、得と申談候處、宮城ハ格別之試効も無御座、殊聞ノ一事ニて處置等は難決申。植木は痧家ニ於てハ玄妙之説も多候へ共、全軀分配家ニて、外之治療ハ敬服も難致事も多、持久腹痛等も兼痧之事のミ申、貴顔ならてハ難申上候。其外ハ五十歩百歩ニて、烏頭湯之沙汰ハ猶更特抜之説も相聞不申。福井立助は鄙生是迄謁見中之人物ニて、學術兼備之様子、大ニ愉快仕候。且御症状委曲能吞込之事ニて、烏頭煎等試効之儀決而瞑眩之恐無之、又奇特之功も相見不申、一旦之功ハ随分有之、瞑眩とても巴豆剂抔之可恐ニは不似と申候。乍去格別是ニ而根ヲ断と申試効方ハ無之、一時之功即功、随痛随服、轉輾相試候事と申候。猶委曲ハ拝顔可申上候。右之趣御考弁可被下候。

一四月上旬御引受も無滞御済、此上なから御安心、乍憚御同喜仕候。御痛傷中御手たすかり、少し尊兄御休息も相成可申、乍影御同喜仕候。弊家一件之儀も委曲承知、御尤ニ存候。御取込之中、御懇志之段萬々奉謝候。右申上候仕合、諸事廢棄少も相勉候儀相成不申候。書状等長文ハ前後遺忘、相分可申や、無心元奉存候。御推覧奉希候。何分不遠罷出、萬々御断可申上候。何分此上御疲勞出不申様、御自奮專一奉存候。草々頓首。丸川一郎 六月八日 赤木尊兄

⑥宮武正蔵書簡一寛政7年(1795)10月7日、赤木修平宛一(赤木制二氏所蔵)

一筆啓上仕候。冬景相催申候。愈御揃被成御清安被成御座、奉恭喜候。弊屋無事罷在候。乍慮外御安心可被下候。其後久々以書中不得貴意、甚疎闊之至ニ打過申候。御近状如何被為在候哉。御新得被仰聞可被下候。扱從兄植田正善、去ル七月十六日朝発症、始は寛症之様ニ御座候所、十九日頃より差重り、廿四日五ツ時落命仕候。享年五十四。下拙も其節洪水、諸川湧出、道路梗塞、廿四日強而罷出候所、早属續ニ而御座候。磯野敬甫、御伝聞之通、去秋八月、東武ニ而長崎下向之御奉行伊賀内匠様御供、長崎へ下り候所、彼地ニ而五月とやら発病、水腫ニ而八月廿四日死去仕候。扱々兩人共吾黨ニ候間、残念之義ニ御座候。近年諸氏落命、心背御座候。随分御用心御自重可被成候。古松軒翁如何、未滞留ニ御さ候哉。委曲御聞セ可被下候。此節短日、風疫流行、

甚多用、幸玉島迄便承候ニ付、右両生之事申上度、早々乱書にて申上候。余事尚期後日之時候。乍末行、御賢室様へ宜被仰上可被下奉頼候。妻も宜申上度申候。恐々謹言。宮武正蔵 十月七日夜 赤修平様玉按下

尚々、丸川氏如何。嘸儒医とも昇晋盛行と奉存候。對命之日、宜御傳可被下候。平田源次殿四男、貴国岡田御家中仙石氏へ養子ニ被參候。尾池平太氏媒妁ニ而、九月末渡海之由。此節帰国と奉存候。又申上候。合田大介も当三月廿九日、急疴ニ而斃申候。以上。

⑦宮武正蔵書簡一寛政7年(1795)12月3日、赤木修平宛一(赤木制二氏所蔵)

(前缺)御契約被成候由、定而前月良辰ニハ無御障御合叠、萬々首尾能御整被成、日出度奉存候。何角御心配被成候御義と奉存候。乍然吉事御世話、御心勇ニ可被思召奉察候。御令男当時四人ニ御座候よし。相胤蕃衍、日出度御義ニ奉存候。御成立之後、各御成材なるべし。御愉快之御義ニ御座候。随分御倚養專一二而御座候。賤郎御尋被下、忝奉存候。昨年九月十日男子生申候。当時男子兩人、皆無障成立仕申候。御安心可被下候。

一先頃御病用ニ付、岡田へ屢御枉駕、古松軒へ御逢被成候由、縷々被仰下、謹而拝見。先々古松軒も無障帰国被致候由、老翁安意と奉察候。東武より末格別之御沙汰も無御座、從御領主様御會釋被為仰付候由、先々珍重之事ニ御座候。倍壮健と奉存候。

一九月尾池氏岡田へ被參候節、貴家御訪不申し候事、御不服ニ被為思召候旨、古松軒へ御噂之義、一一御尤奉存候。惣てヶ様之事彼是被為候人物ニ御座無候。彼人も岡藩へ仕官之義、古松軒取斗候由、如何可相成哉。何れニ而も、是非仕官可仕覚悟ニ御座候哉とも不相聞候。内々ハ彼ノ人より被望候義ニ哉、又太夫など彼人ノ医事信仰ニ而不仕哉と被及噂候義ニ御さ候哉、古松軒中ニ而双方へすゝめ候事ニ御座候哉。大野原も近辺之医人ハ皆物故仕、多クハ三十未滿ノ人耳ニ御さ候得は、家柄と云ひ年輩と云ひ、糊口のならさる事は有之間敷候。先代より之家産・田地は皆他人ノ有ニ相なり申候。昨夏〔虫損〕四匁目之頼母子出来仕申候。これにて居宅は我有ニ相なり候由。僕も遠方ゆへ委敷事ハ不承候。今時ハ甚家内少、夫婦兩人ニ門人一人、これのミニ而御さ

候。子息ハ拙家へ參居申候。何と申候而も家内少人も甚安吐御さ候。

前段申上候通、西邊も合田大助・植田正善等物故後、良医乏候得は、得時候様ニ被存候故、急度口腹之資は相成可申義と奉存候。如仰人心如面^{ヲモテ}ニテハ御座候得共、御同然為五斗米罄折青事は不好事ニ御座候。如貴示、彼一時は一時。古先生之胤ニ而も不似其先考候は致方も無之候義、立誠先師地下之御靈も御氣之毒ニ可為思召と覺頼仕候。前段申上候通、元來岡田ノ太夫方流義信仰ニテ御抱被成度心中ニテ太夫より始而沙汰アリ哉、又ハ左はナクテ古松軒より太夫へ申入御抱も被成候様ニも取合候義ニ哉、又は平太子内意は懇望^{ホカセ}ニテ古松軒ヲ私ニ頼ミ太夫へ持込義ニ哉、御序ニ御聞可被下候。穴賢一廉ニ御頼申上候。啓蒙解一冊被為投被下、千万難有入手仕候。早々謄書相濟次第、奉返可仕候。段々御掛意御世話被成下、感荷仕候。平田翁御手紙拝見仕候。至極御尤千万奉存候。随分信仰、帳中ニ秘し申候。決して他へ御出し不申候。幾重ニも宜布御挨拶御致聲被成可被下奉頼候。則御状返却仕候。

一乍末書、御令室様へ宜布被仰上可被下奉頼上候。妻も宜申上度、尚御加書被下候御礼厚申上度申出候。

一久敷不得貴意、御床敷、何卒春來ハ渡海、蒙貴教度、相含罷在候。扱々格別用事も不見付候而は、急度踐出難出ものニ御座候。貴閑も御さ候ハ、御慰旁春日御渡海奉希候。

一加久馬 合田慶治ノコト 御問被下候。甚不遇、それゆへ大困乏。妻も死去、当時七歳男子一人。父子兩人、上高瀬ニ暫住居致候得共、何分不遇ニ御座候所、正善死後、上野村へ引越候よし承申候。程能候得かしと奉祈候義ニ御さ候。委曲ハ不承候。只々困乏ノ甚敷事ノ由承申候。氣之毒仕候。

一右貴答、并ニ御謄本落手之段申上度、草々如是御座候。時甚混雜紛々之事御さ候而延引、并ニ此度不快一二日、最早年内無余日候。來春可得貴意候。只平安ニ御越年奉祈候。恐々頓首。 維明 臘月三日子明尊兄

尚々先達而画書奉呈、鮑魚霜之事御頼申上候。御恵可被下奉頼上候。

本稿は科研費助成基盤研究（B）「近世後期の医学塾からみる漢蘭折衷医学の総合的研究」〈課題番号25282066、代表者町泉寿郎〉による成果の一部である。

本稿執筆にあたっては資料の調査閲覧に関して、故赤木制二氏、中澤淳氏、喜多村安正氏に格別のご高配をいただいた。ここに記して深甚なる謝意を表する。

注

- 1) 医家中澤家の歴史に関しては、中澤淳「三豊市詫間町中澤家と江戸末期～明治初期の医学書について」（『香川の風土記』4号、2015）を参照のこと。
- 2) 町泉寿郎「中島宗仙・友玄と一九世紀日本の漢蘭折衷医学」、『備前岡山の在村医中島家の歴史』中島医家資料館・中島文書研究会編、思文閣出版、2015年。
- 3) 原資料未見。佐々木礼三「讃岐医人伝」（『香川県医師会誌』14巻3号、1962）所収による。
- 4) 『三百藩家臣人名事典』巻6、新人物往来社、1989年。
- 5) 藤原高男「尾池立誠について」（『香川の歴史』5号、1985）。
- 6) 赤木家の歴史については、同家所蔵典籍を整理編纂した赤木制二氏自筆の『大棗亭図書目録』、および目録に附された「後記」による。
- 7) 赤木太郎の吉益南涯塾への入門は、門人録の文化4年4月の箇所に記録されていて確認できる。町泉寿郎「吉益家門人録（三）」835頁（『日本医学史雑誌』47巻4号、2001）参照。
- 8) 薫陵所蔵本に見られる語句の出典等に関する書入れは、赤木家に所蔵する同書に残された8代赤木立による書入れと一致する。立が薫陵の書入本から重鈔した可能性もあり、尾池家と赤木家の医学の同質性を物語る。また、『養庵先生碑銘行状』が艮山流医学を学習するためのテキストとして使用されたことを窺わせる資料としても注目される。
- 9) 「山脇東洋門人帳」に入門記録がある（『京都の医学史 資料編』思文閣出版、1980）。
- 10) 中国古代の伝統的治療法「汗・吐・下」のうち吐方は長く途絶していたが、越前の奥村良竹が独

自に開発し、山脇東洋は門人永富独嘯庵等を派遣してこれを学ばせた。

- 11) 中澤家所蔵の薫陵写本に、渡辺葭谷『論語臆説』（1753序）が残る。渡辺葭谷（1689～1760）は名毅・孝恭、通称新蔵、別号弘堂、山脇東洋の儒学の師として知られる。『論語臆説』は古注を基本にしており、薫陵の儒学知識が古学系のものであったことがうかがえる。

- 12) 宝暦9年 隣村・金毘羅 石川林之介・三木市太郎入門

明和2年 冬 西山敬蔵帰国

明和3年

3月13日 宮武勝三郎入門

3月24日 備中松山 平松周介入門 明和5年8月23日帰国

3月25日 三谷尚賢帰国

4月1日 馬場主礼帰国

4月5日 合田彌四郎入門

4月7日 石川琉流帰国

7月8日 中村民之丈入門

明和4年

3月11日 阿州脇町 井上主馬入門

6月 磯野平次入門

6月 西原門弥入門

9月25日 阿州半田人 結城尚策正武入門

9月25日 下河邊永太郎正次入門 明和5年4月18日改名賢蔵

9月25日 加藤義見信之入門

明和5年

正月12日 阿州半田 崎川和六入門

正月12日 内藤禎蔵入門 3月15日入塾

3月15日 阿州半田邑 前田禎策入門 同州辻岩瀬玄忠姪

4月11日 阿州貞光 西村安郎入門 4月18日改名俊蔵

6月9日 阿州半田 浅野安太入門 父吉之丞

7月30日 阿州芝生 宮田立昌入門

9月15日 岡本邑 矢野松太郎入門 9月晦日改名清庵

10月19日 豫州内野子邑 高橋軒柳入塾 11日入門

明和6年

4月23日 義永・磯野生京遊 9月12日帰国

5月1日 奥島和介入門

6月17日 赤木茂一郎来 18日入門

(明和2年以降の門人は、薫陵筆『薫陵子』巻7による。)

13) 尾池薫陵編『諸家文集』に合田求吾自筆「素靈正語序」が収録されている。

14) 尾池薫陵編『諸家文集』には、合田求吾宛ての諸家尺牘として、村井琴山「復合田求吾」、村井東嶽「復合田求吾」、前潤「送合田求吾序」、本木允懷「与合田求吾」、磯野員直「報合田求吾」が収録されている。一方、合田求吾側にも尾池薫陵と村井琴山の往復尺牘の写しが残されていて(鎌田共済会郷土博物館所蔵『合田強関係文書』)、求吾と薫陵の間に双方向の交流があったことを裏付ける。

15) 赤木家には、安永6年に浚が尾池塾で筆写した書籍として、5月に貝原益軒本『本草綱目(品目)』、8月に尾池立誠『耻斎暇録』が残ることから、かく推定する。

16) 尾池家の門流に属する赤木家でも、文化4年(1807)に吉益南涯に入門した8代立を除いて、代々基本的に後藤艮山流・尾池流を継承したので、同家蔵書には吉益流の書籍が全体として少ない傾向が見られる。

17) 吉益流から距離をとった尾池家医学とその普及の意義については、今後の検討課題である。例えば、『吉益家門人録』などを用いて、讃岐・備中の各郡の入門者数に何らかの特徴が見られるか、またこの18世紀後半の古方医学受容が次代の蘭学接受にどのような影響を及ぼしたかといった問題などが考えられよう。

18) 『竹山国字牘』に中井竹山の宮武正蔵宛書簡が収録されている。

19) 西村天因『懷徳堂考』(1925)によれば、三宅石庵は1700年頃、讃岐琴平の木村平右衛門(俳号寸木)に招かれて講学したことがあり、熊胆を用いた反魂丹という丸薬を製して讃岐で販売していた。春楼も売薬業を継承して相当な収入を得ていた。また、しばしば石庵が招かれて学問を講じた平野の含翠堂は、薬種商を営む土橋友直が創設し

た学校である。

20) 丸川松隠の事績については、逸見芳春『丸川松隠評伝』(備北民報、2007)参照。

21) 合田大介の医学については、長与健太「『紅毛医術聞書』にみる合田大介のキャンセル論」(『日本医史学雑誌』41巻3号、1995)を参照のこと。大介は求吾の陰に埋没しているが、京都・長崎等に遊学し、吉雄芦風に学んだ優れた医者であった。

22) 寛政中の福井楓亭や尾藤二洲(混沌社出身)の幕府登用はよく知られているが、懷徳堂に学んだ丸川松隠もまた松平定信から仕官に関する照会があったのを断り、先祖の旧主である新見藩に仕えたことが知られている(佐藤一斎撰「松隠丸川松隠先生碑銘」)。

23) 古川古松軒は備中下道郡(現総社市)出身の地理学者として知られ、長年全国各地を旅行して優れた紀行文をまとめ、その実績によって幕府巡検使の随員に加えられ東北地方を踏査した。松平定信に知られ、幕府から召出されたのち、帰郷して岡田藩の士分となった。贈正五位(1910)。